ローマ人への手紙第六八回質問

7：1 それとも、兄弟たち、あなたがたは知らないのですか―私は律法を知っている人たちに話しています―律法が人を支配するのは、その人が生きている期間だけです。

7：2 結婚している女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死んだら、自分を夫に結びつけていた律法から解かれます。

7：3 したがって、夫が生きている間に他の男のものとなれば、姦淫の女と呼ばれますが、夫が死んだら律法から自由になるので、他の男のものとなっても姦淫の女とはなりません。

7：4 ですから、私の兄弟たちよ。あなたがたもキリストのからだを通して、律法に対して死んでいるのです。それは、あなたがたがほかの方、すなわち死者の中からよみがえった方のものとなり、こうして私たちが神のために実を結ぶようになるためです。

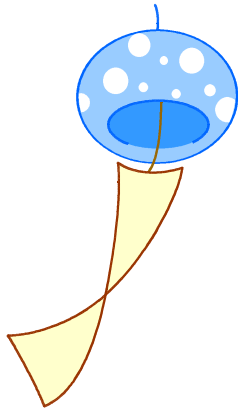
（ロマ七章一―四節／新改訳２０１７）

2：14 私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。（コロサイ二章一四節／新改訳２０１７）

（1）コロサイ二章一四節の言葉の意味を説明して下さい。

キリストとの結婚

（ロマ七章一―四節）



わが国のクリスチャンの弱さは、自我の確立されていないところにあります。日本人は、本当の意味での個人の尊厳とか、自分についての自責に乏しいのです。そのため、宗教もまた家の宗教であって、ひとりひとりの宗教ではありません。しかし、本来、宗教というものは、個人個人のものであって、家の宗旨が何であるから自分もそうだといったものではないはずです。日本人は稲作民族であり、また単一民族であるため、いつもほかの人々と同じように行動することを身につけてしまっています。そういう所に身を置いているかぎり安全だと思って安心しています。ですから、日本人における罰則は、いつも村八分といった形をとり、その仲間からはじき出してしまうのです。このことは、わたしたちが信仰について考える場合、同様に気をつけておかなければならないことではないかと思います。だれか人間とのつながりで、信仰を持ちやすいのです。暖かい交わりの中に迎えられたとか、友人がそこにいるとか、牧師先生がやさしく迎えてくれ、よく面倒を見てくれるといった具合に、人間とのつながりが第一で、主とのつながりを求めて教会に来る人はほとんどありません。

そのため、今度は人間的要素で簡単に教会へ来なくなり、信仰から離れて行ってしまいます。ですから、人間的な点に目を向けて教会に来ていた人が、早晩それから主との関係に目を向け、それを確立しないと、本当の信仰を得そこなってしまうことになりかねません。そこで、主との関係について教えているこの個所から、わたしたちの主との関係について、もう一度教えられたいと思います。

この個所は、前にも述べましたように、結婚を例に引いてきて、律法との関係が絶たれたあと、キリストと結婚し、キリストと結びつけられたのだということが教えられています。

わたしたちは生まれながらにして、律法の下にある者です。律法の下にあるということは、律法の要求しているところに従わなければならない存在という意味ですが、それに従えない者であるために、それは同時に罪の奴隷にほかなりません。そのことを、パウロはここで結婚にたとえ、律法と結婚していたのだと言っています。法律の観念からすれば、妻は夫の支配を受けるわけですから、生まれながらの人間が律法という夫の支配を受けるのは当然のことになります。しかも、律法の要求に少しも従えず、そのため罪人として歩んでいたわけです。ところが、キリストが十字架上で死んでくださり、わたしたちと律法との関係が絶たれた時、わたしたちは自由人となったのです。キリストが十字架上で死なれたのは、律法の要求を満たすためでした。ですから、キリストが十字架上で死なれた時、そこで律法の要求が完全に満たされ、その呪いは効力を全く失ってしまいました。そのことについて、

パウロはコロサイ教会への手紙の中で、次のように説明しています。

「わたしたちを責め、不利におとしいれる責務証書を、いろいろな規定とともに、すべて無効にし、十字架に釘づけてしまわれた。[1]」

こうして、わたしたちは律法が全く効力を失い、律法との結婚関係は解消したのです。

このことと全く同じことを、パウロはガラテヤの諸教会への手紙の中で、次のように述べています。

「わたしは神に対して生きるために、律法を通して律法に対して死んだものだからである。わたしはキリストとともに十字架につけられてしまった。もはやわたしが生きているのではなく、キリストがわたしのうちに生きておられるのである。[2]」

律法との関係が解消されたのは、わたしたちがキリストと結びつけられ、キリストとともに死に、その死の結果として律法との関係が解消されたのです。

ですから、わたしたちクリスチャンは、法律上の概念からしても、律法に縛られることはありません。全く自由なのです。それだけでなく、実際上、わたしたちの信仰生活に律法はもはや何の力も持っていません。生まれ変わってクリスチャンになる前には、律法がわたしたちの生活を支配していました。あれをしなければならない、これをしなければならないと、律法が要求し、それができないため、わたしたちはいつも悩み、苦しみ、罪意識を持ち続けていました。しかし、

今はわたしたちのうちに、そのような力は働くことがありません。ですから、律法はもはやわたしたちを断罪することがないのです。

わたしたちが律法に死に、律法との婚姻関係が解消したのは、主イエス・キリストと結婚するためです。きょうのこの個所がいみじくも教えていることは、このことです。わたしたちが今でも律法と結婚したままであるなら、主イエス・キリストと結婚することはできません。それは、姦淫の罪を犯すことになります。わたしたちは、もう律法に気を使う必要はないのです。わたしたちは新しい夫である主イエス・キリストに最大の関心を払わなければなりません。古い夫である律法を恐れる必要はありません。もうそこには古い夫はいないのです。わたしたちのすべてを、新しい夫である主イエス・キリストに向けなければなりません。そうでないと、主イエス・キリストに対して二心の者となり、主イエス・キリストを悲しませることになってしまいます。

パウロは、わたしたちクリスチャンとキリストとの関係を結婚関係として描き、教えていますが、それはこの個所だけではありません。エペソ教会への手紙でも教えています。

「夫たち。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、水で洗うことにより、みことばによって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、また、しみもしわも、そのようなものが何一つない、きよく傷のない栄光の教会を、ご自分のそばに立たせるた

めなのである。……だれも、自分の身を憎んだ者はいない。むしろ、これを養い育てるものである。それは、キリストが教会にされたのと同じである。わたしたちは、キリストのからだの部分なのである。『それゆえ、人はその父母を離れ、妻と結ばれ、一体となるのである。』この奥義は大きい。わたしはキリストと教会とを指して言っているのである。[3]」

ここに注目すべきいくつかのことばがあります。「わたしたちはキリストのからだの部分なのである」とか「一体となるのである」という表現です。キリストとわたしたちクリスチャンの結婚関係は、実にこのようなものです。それをパウロは「この奥義は大きい」といって説明しています。キリストとわたしたちの二つのものが一つになるというこのことは、奥義です。わたしたちクリスチャンにしか示されない奥義です。わたしたちはもはやキリストのものです。夫であるキリストがわたしたちを「きよめて、聖なるものと」してくださり、「養い育て」てくださいます。それは、キリストが夫であるからです。

わたしは以前アメリカで大きな邸宅に行ったことがあります。わたしを迎えてくれたその家の主婦は、いかにも貴婦人らしく、しかもクリスチャンとしての暖かい心でわたしをもてなしてくれました。聞くところによると、その婦人は昔は貧しい家の人であったそうです。しかし、わたしにはとてもそのような人であったようには見えませんでした。生まれながら高貴な家柄の人であったように見えました。けれども、

そうではなく、昔はとても貧しい家に育ったということでした。ところが、彼女がクリスチャンになり、この家の若主人に見そめられ、この家に嫁いで来てから、彼女は変わりました。このりっぱな邸宅の主婦にふさわしい人となったのです。それは、その夫が彼女をそうさせたのです。

わたしたちクリスチャンにとって、キリストとの結婚は、地上における一時的なものとは違って、永遠の結びつきを意味します。どのようなものによっても、その結びつきがゆるんだり、解かれたりすることのない確かな堅い結びつきです。パウロはそのことについて、次のように断言しています。

「わたしはこう確信している。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、のちに来るものも、力ある者も、高いものも、深いものも、そのほかどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにある神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない。[4]」

注

(1)コロサイ教会への手紙二章一四節。

(2)ガラテヤの諸教会への手紙二章一九―二〇節。

(3)エペソ教会への手紙五章二五―二七、二九―三三節。

(4)ローマ教会への手紙八章三八―三九節。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解（ロイドジョンズ・ロマ書講解要約）より